

命の経験の第四段階へと入り、
完全に成長した人に到達して神の定められた御旨を完成する

(木曜日——午前の第二の部)

メッセージ 2

命の経験の第四段階 (1)

からだを認識する

聖書：ローマ 12:5. I コリント 12:12. エペソ 1:22-23. 2:16. 4:4, 12, 16. 5:30.

コロサイ 1:18, 24. 2:19

I. わたしたちは、からだを認識するために、自己を対処し、自己を拒絶しなければなりません。自己は、からだの敵です——マタイ 16:18, 21-26. ルカ 9:23-25 :

- A. 自己は、墮落した魂であり、神からの独立を宣言し、このゆえにからだから独立します。からだに対する最大の問題、最大の妨げと反対は、自己です。
- B. レビ記第 14 章において、らい病の人の毛をそって彼を清めることは、自己の難点に対処することを表徴します。かみそりは、十字架を表徴します——9 節：
1. 頭の毛は、人の栄光を表徴します。あらゆる人は、ある領域において誇りを持っています。すなわち、ある人は自分の家柄を誇ります。ある人は自分の教育を誇ります。ある人は自分の美徳を誇ります。ある人は、主を熱心に愛することを誇ります。ほとんどあらゆる人には、誇ったり、自分に栄光を帰したり、人の前で見せびらかしたりする領域があります。
 2. 髭は、人の尊貴を表徴します。人々は、自分の地位、家族の背景、自分の霊性について、自分自身を尊重します。人々は、自分が他の人よりも高いという優越した感覚を常に持っています。
 3. まゆ毛は、人の麗しさを表徴します。あらゆる人は、天然の長所や得意とする点を持っています。それらは、神の救いの経験から出て来たものではなく、天然の誕生から出て来たものです。
 4. 全身の毛は、人の天然の力を表徴します。わたしたちは、天然の力、天然の方法や意見に満ちており、自分は主のためにこれやあれを行なうことができ、またあらゆる事を行なう能力があると思っています。
 5. 十字架の「かみそり」を通して自己のすべての面が対処される時、またわたしたちが何も持たず、無であるとき、わたしたちは清いのです——参照、ピリピ 3:7-11。
 6. わたしたちは、十字架を通して、その霊によって、あらゆる事を行なうことによって、自己を徹底的に拒絶し、キリストのからだのために互いにキリストを分与すべきです。

II. わたしたちはからだを認識するために、からだのビジョンを見なければなりません——エペソ 1:17. 3:3-6 :

- A. 主は、ダマスコへの途上のサウロに現れたとき、信者を迫害することは主を迫害することと同じであることを、彼に示しました——使徒 9:3-5 :

1. 主は、「なぜわたしを迫害するのか？」と尋ねました。主は、「なぜわたしを信じる者たちを迫害するのか？」とは尋ねませんでした。サウロが、「主よ、あなたはどなたですか？」と尋ねたとき、主は、「わたしはあなたが迫害しているイエスである」と言いました—— 4:5 節。
 2. この「わたし」は、団体の「わたし」であり、主なるイエスと彼のすべての信者から成っています。これによってサウロは、主イエスと彼の信者たちが一人の偉大な人、すなわち、素晴らしい「わたし」であることを見始めました。
 3. 主はサウロに、からだの肢体を迫害していたとき、かしらを迫害していたことを示しました。からだに対して犯すあらゆる罪は、かしらに対して犯す罪です。
 4. 主がご自身をサウロに現した日は、彼がからだを見た日でした——ローマ 12:5。
I コリント 12:12. エペソ 1:22-23. 2:16. 4:4, 12, 16. 5:30. コロサイ 1:18, 24. 2:19.
- B. そのような高い啓示の後、主はサウロに直接的に語ったのではなく、彼に町に入るようにと命じました。そうすれば、彼のなすべき事が告げられるようになっていました（使徒 9:6）。これもまたからだの啓示でした：
1. 主は、彼のからだの一体であるアナニヤを通して、サウロをからだにゆだねました。それは、サウロがキリストのからだとの一体化へともたらされるためでした。
 2. これは、サウロにキリストのからだの重要性を印象づけたに違いありません。そして、救われた信者はキリストのからだの肢体たちを必要とすることを、彼が認識するのを助けたに違いありません。
 3. 主は小さな弟子を遣わして、サウロに按手しました。この弟子は、「兄弟、サウロよ」（17 節）と言いました。これは、サウロをキリストのからだの中へともたらし、彼を聖霊で満たし、彼を油塗りの下へともたらししました。
- C. 新約では、キリストについて二つの見方があります。一方において彼は、ナザレ人イエス・キリスト、すなわち、個人のキリストです。他方において彼は、キリストと召会、すなわち、団体のキリストです—— I コリント 12:12。
- D. わたしたちに必要なのは知識ではなく、啓示であり、キリストのからだを認識して、からだの領域の中へと入ることです。神からの啓示だけが、わたしたちをからだの領域の中へともたらしめます。その時はじめて、キリストのからだはわたしたちの経験となります。
- E. 人はいったんキリストのからだを見るなら、個人主義から免れます。彼は、もはや自分自身のためには生きず、からだのために生きています。彼は、からだの感覚を持ち、からだを中心とし、自己中心から免れます——ローマ 12:5。
- F. あらゆることは、わたしたちが見ることにかかっています。自分が肢体であることを見ている人たちは、必ずからだを尊び、他の肢体を尊重します——ピリピ 2:3-4。
- G. もしわたしたちが真にからだの中の自分の地位を見るなら、それはわたしたちが二度目に救われるかのようです——参照、ヨハネ 1:49-51。
- III. わたしたちはからだを認識するために、からだの制限の下にいなければなりません。わたしたちはからだの肢体として、他の肢体たちによって制限されるようにしなければならず、わたしたちの度量を超えてはなりません：

- A. 神はからだのすべての肢体を、彼の意図するままに置かれました。かしらはわたしたちに、からだの特別な地位を案配し、わたしたちの特別な機能を持たせませす——ローマ 12:4-5。 I コリント 12:15-21 :
1. わたしたち一人一人の肢体は、キリストのからだの中に自分自身の位置があります。それは神によって割り当てられたものであり、わたしたちが受け入れるべきものです。そのような割り当ては神の意志にしたがったものですから、あらゆる肢体は必要なのです—— 19-22 節。
 2. あらゆる肢体には、特定の位置があり、特定の割り当てがあり、特別な分があり、それらをもってキリストのからだに仕えます。あらゆる肢体には、それ自身の特徴があり、それ自身の能力があります。これらの特徴が、それぞれの肢体の位置、分、務めを構成します——ローマ 12:4-8。
- B. からだの成長と発展のための基本的な要求は、わたしたちが自分の度量を認識して、それを超えないことです——エペソ 4:7, 16 :
1. わたしたちは、喜んで自分の度量によって制限されなければなりません。わたしたちは自分の度量を超えるやいなや、かしらの權威を超え、油塗りの下から出てしまいます——ローマ 12:3, 6。
 2. わたしたちは自分の度量を超えると、からだの秩序に干渉します。自分自身について思うべきことを超えて、思い上がり、冷静な思いを持たないことは、からだの生活の正しい秩序を無にします—— 3 節。
- C. わたしたちはパウロのように、神がわたしたちにどれだけ測ってくださったかにしたがって行動し、活動し、神の尺度と度量の制限の中にとどまるべきです—— II コリント 10:13 :
1. わたしたちは自分の働き、経験、主に対する享受について証しをするとき、限度の中で、すなわち、一定の制限の中で証ししなければなりません。
 2. わたしたちは、働きが拡大することを期待しますが、どのようにして神の制限の下にとどまるかを学ばなければなりません。わたしたちは、限度のない拡大を期待すべきではありません。もしわたしたちがその霊にしたがって働きを拡大させるなら、いつもある種の制限があります—— 13-15 節 :
 - a. 内側でわたしたちは、主の意図はただある程度まで働きを拡大させることであるという感覚を持っています。ある点を超えて働きを拡大させることに、内側でわたしたちには平安がありません——参照、2:12-14。
 - b. 外側の環境の中で、主はある事柄を起こして、働きの拡大を制限させるかもしれません。環境は、わたしたちが特定の境界線を越えるのを許しません——参照、ローマ 15:24。
 3. 召会の奉仕においてわたしたちは、神がわたしたちにただこれだけの分量を量られたことを認識する必要があります。わたしたちは、自分自身を伸ばしすぎるべきではありません—— 12:3-4, 6 前半。
 4. わたしたちが行なうすべての事は、からだの中で、からだを通して、からだのためであるべきです——参照、エペソ 4:4。ゼカリヤ 4:6。

務めからの抜粋 :

キリストのからだはキリストの表現である

キリストのからだとは何でしょうか？ キリストのからだは、地上におけるキリストの生活の継続です。キリストは地に来て地上で生活したとき、体を通してご自分を表現されました。今日キリストはなおも、ご自身を表現するのに体を必要とされます。人が自分であるすべてを表現するのに体を必要とするように、キリストはご自身を表現するのに体を必要とされます。からだの機能は、キリストの満ち満ちた表現になることです。わたしたちは、耳、口、目、手、足という体の一つの肢体だけを通して、自分の性格を現すことはできません。同じように、キリストも彼の性格を、彼のからだのどの一つの肢体を通して現すことはできません。キリストのからだ全体が彼を現すのです。わたしたちは、キリストのあらゆるものが、彼のからだを通して表現されることを見なければなりません。これがすべてではありません。キリストのからだは、地上におけるキリストの延長と継続です。キリストは地上で三十年以上を費やして、ご自身を啓示されました。彼はこれを個人のキリストとして行なわれました。今日、彼は召会を通してご自身を啓示しておられます。これは団体のキリストです。以前、キリストは個人として表現されました。今や彼は団体的に表現されます。

キリストのからだは神のご計画を完成する団体の器である

神が求めておられるのは団体の器であって、個々の器ではありません。神は、ご自身のために個人的に働く数人の熱心な、献身した人を選んでいるわけではありません。個々の器は、神の目標とご計画を完成することはできません。神は召会を選ばれました。そして彼は召会を求めておられます。団体のキリストとしての召会だけが、神の目標とご計画を完成することができます。

わたしたちの人の体を考えてみてください。体のどの肢体も独立して行動することはできません。体が一本の手や一本の足に依存することは不可能です。しかしながら、もし体が一つの肢体を失えば、全体的ではなくなります。キリストのからだはすべての信者から成っています。あらゆる信者はキリストのからだの中の肢体であり、あらゆる信者は不可欠です。

キリストのからだは実際です。召会生活も実際です。神の御言は、召会はキリストのからだの「ようである」とは言っていません。召会はキリストのからだ「である」と言っているのです。外側のもので、わたしたちの物質の体の一部分になり得るものではありません。わたしたちは自分の体に衣服を着せることはできても、衣服はわたしたちの体の一部分にはなりません。わたしたちのどんなものも、決してキリストのからだの一部分になることはできません。なぜなら、からだの中で、「キリストがすべてであり、すべての中におられる」からです（コロサイ 3:11）。わたしたちの中にあるものでキリストの一部分でないものは何であれ、わたしたちがキリストのからだを内側で知ることを妨げます。罪はわたしたちがキリストを見ることを妨害し、天然の命はわたしたちがからだを見ることを妨害します。わたしたちはみな、キリストのからだの中のわたしたちの地位を見なければなりません。わたしたちが真にからだの中の自分の地位を見るなら、それはわたしたちが二度目に救われるかのようです。

アダムの命は、個人主義的であり独立したものです。アダムにある人はみな同じ命を

分け合っていますが、彼らの間に交わりはありません。わたしたちはみな罪を犯しますが、それぞれ自分の道を取ります。アダムの中の人みな、分離した個人として生活します。キリストの中で、個人主義的なものはすべて除き去られます。わたしたちはからだの生活を知りたいなら、わたしたちの罪深い生活と天然の命から救い出されるだけでなく、わたしたちの個人主義的な命からも救い出される必要があります。個人的な要素はすべて出て行かなければなりません。なぜなら、個人主義的なものは何も、神の目標に到達することができないからです。

肢体であることとクリスチャンであることとの違い

新約は、肢体であることとクリスチャンであることには違いがあることを見せています。クリスチャンであることは個人主義的なものですが、肢体であることは団体的なものです。クリスチャンであることは、人が自分自身のために何かをすることですが、肢体であることはからだのためのものです。聖書には、反対の意味を持つ多くの用語があります。例えば、純潔と不潔、聖と俗、勝利と敗北、その霊と肉、キリストとサタン、王国とこの世、栄光と恥などです。これらはすべて相反するものです。同じように、からだは個人に反対します。御父がこの世に相對し、その霊が肉に相對し、主が悪魔に相對するように、からだは個人に相對します。人はいったんキリストのからだを見るなら、個人主義から免れます。彼は、もはや自分自身のためには生きず、からだのために生きています。わたしはいったん個人主義から救い出されると、自然にからだの中にいます。

キリストのからだは、教理ではありません。それは領域です。それは教えではなく、命です。多くのクリスチャンはからだの真理を教えることを求めますが、からだの命を知っている人はほとんどいないのです。キリストのからだは、全く異なった領域における経験です。人は、義とされることなしに、ローマ人への手紙を知ることができます。同じように、人は、キリストのからだを見ることなしに、エペソ人への手紙を知ることができます。わたしたちが必要とするのは知識ではなく、啓示であり、キリストのからだの実際を知って、からだの領域に入ることです。神からの啓示だけが、わたしたちをからだの領域の中へもたらし、その時はじめて、キリストのからだはわたしたちの経験となります。

使徒行伝第2章で、ペテロが一人で福音を宣べ伝え、三千人の人が彼を通して救われたかのように。しかし、わたしたちは、他の十一人の使徒たちがペテロのそばに立っていたことを覚えていなければなりません。キリストのからだは福音を宣べ伝えていたのです。それは個人の宣べ伝えではありませんでした。わたしたちはからだの展望を持つなら、個人主義はわたしたちをどこにももたらさないことを見ます。

わたしたちが、クリスチャンは肢体にすぎないことを認識するなら、もはや高ぶることはなくなります。あらゆることは、わたしたちが見ることにかかっています。自分が肢体であることを見ている人たちは、必ずからだを尊び、他の肢体を尊重します。彼らは自分の美德だけを見ません。彼らは、他の人が自分より良いことを直ちに見ます。

すべての肢体には機能があり、機能のすべてはからだのためです。一つの肢体の機能は、からだ全体の機能です。一つの肢体が何かを行なうとき、からだ全体がそれを行ないます。口が語るとき、体全体が語っています。手が働くとき、体全体が働いています。足が歩くとき、体全体が歩いています。わたしたちは肢体を体から分けることはできません。です

から、からだの肢体の行動は、からだを中心としなければなりません。肢体が行なうことはすべて、からだのためであるべきです。エペソ人への手紙第4章は、からだは成長して一人の完全に成長した人へと至りつつあると言っています。それは、個人が成長して完全に成長した人たちへと至りつつあるとは言っていない。第3章で、キリストの愛を知る能力と、主の広さ、長さ、高さ、深さを会得する能力は、すべての聖徒たちと共にあります。だれも自分で知ることでも会得することもできません。個人には、キリストの愛をそのような方法で経験する時間も能力もありません。

コリント人への第一の手紙第12章14節から27節は、肢体が持つかもしれない二つの誤った概念について語っています。すなわち、(1)「わたしは……ではないから、体に属していない」(15節)。これは自分自身を軽んじ、他の人の働きをむさぼることです。(2)「わたしはあなたを必要としない」(21節)。これは自分自身を誇り、一人がすべてを含むことができると考えて、他の人を軽んじています。いずれの観念も、からだにとって有害です。わたしたちは他の肢体を模倣したり、他の肢体をむさぼったりすべきではありません。このようにして、わたしたちは自分が他の人のようになれないことを見いだすとき、落胆したりあきらめたりすることはありません。同時に、わたしたちは他の肢体を軽んじて、自分がさらに良くさらに有益であると考えべきではありません。

からだの感覚

召会生活において、わたしたちはからだの感覚を持つことを学ぶべきです。わたしたちが兄弟姉妹と不和になっているとき、必ず神と不和になっています。あるクリスチャンはちょうのようです。彼らは独立して行動します。ある人たちは蜂のようです。彼らは共に住み行動します。ちょうは花から花へ飛び、自分の好きなように行きます。しかし、蜂は巣のために働きます。ちょうは個人的に生きて働きますが、蜂には体の感覚があります。わたしたちはみな蜂のようになって、からだの感覚を持つべきです。それは、わたしたちがキリストのからだの中で、他の肢体と共に生きることができるところのためです。からだの啓示のあるところには、からだの感覚があり、からだの感覚があるところでは、個人的な思いや行動は自動的に除去されます。キリストを見ることは、罪からの解放という結果になります。からだを見ることは、個人主義からの解放という結果になります。からだを見ることと個人主義から解放されることは、二つのことではなく一つのことです。わたしたちがからだを見ると直ちに、個人としての生活や働きはやめます。それは、わたしたちの態度や振る舞いを変える事柄ではありません。啓示がその働きを行ないます。わたしたちは見ることによる以外に、からだの領域に入ることはできません。内側で真に見ることが、すべての問題を解決します。(キリストの奥義、第3章)

からだの中で、からだを通して、からだのために

今日わたしたちが持っているすべては、からだの中で、からだを通して、からだのためにあります。1925年にT・オースチン・スパークス兄弟はアメリカに招かれました。彼はそこである姉妹に会いました。彼女は病気を通して多くの学課を学び、多くの人々に多くの助けを与えました。彼女は命の務めを持ち、他の人に命を供給する人でした。彼女が学んだ学課は、からだの中で、からだを通して、からだのために学びました。このような

人を今日、神は捜し求めておられます。わたしたちの生活は、からだの中で、からだを通して、からだのためであるべきです。これがわたしたちの標準であるべきです。主がわたしたちを、個人主義からからだの中へと救ってくださいますように。主がわたしたちにからだを見せてくださり、わたしたちがキリストを知る知識に基づいた務めをもって、彼のからだに仕えることができますように。(キリストの奥義、第13章)